

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：24601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26860414

研究課題名(和文) インターネット依存症：日本におけるスクリーニングテストの開発

研究課題名(英文) Development of Consolidated Internet Addiction Scale

研究代表者

野田 龍也 (Noda, Tatsuya)

奈良県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：70456549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：インターネットアディクション(Internet addiction)に関する尺度は数多く開発されているが、日本においては、1998年に提唱された尺度が主に利用されており、臨床家や研究者が、妥当性の高い診断や研究成果の発信を続けるには問題の多い状況であった。本研究では、依存症に精通した精神医学、心理学の専門家と公衆衛生・疫学の専門家が協働し、計量書誌学的手法を用いて、既存の主要なスクリーニングテスト項目を探索的に検討し、インターネットアディクションの概念を整理・統合して、18項目からなるインターネットアディクション新尺度を作成するとともに、この尺度の妥当性を検証した。

研究成果の概要(英文)：Although a number of scales on internet addiction have been developed, Japan has primarily used a scale put forward in 1998, which has been problematic for clinicians and researchers in terms of continuing to deliver highly-valid diagnoses and research results. In this study, experts in psychiatry and psychology familiar with addiction collaborated with specialists in public health and epidemiology to explore existing major screening test items using bibliometrics. These experts organized and consolidated concepts on internet addiction to develop a new scale for internet addiction consisting of 18 items and verify the validity of this scale.

研究分野：疫学、公衆衛生学

キーワード：インターネットアディクション インターネット依存症 行動嗜癖 尺度開発 心理尺度

1. 研究開始当初の背景

Young (1998) はインターネットが「依存」を引き起こす可能性を指摘し、インターネットアディクション (Internet addiction) の概念を提唱した。アルコール依存症をはじめ、多くの依存症は社会的要請のもとに疾病概念が整備され、医療化される経過を経る。インターネットアディクションに関するテストも、社会的な要請に従って数多く開発されており、その度に異なるインターネットアディクションの概念が提唱されているのが現状である。

特に、日本においては、インターネットアディクションに関する適切なスクリーニングテストがある状態とは言えなかった。2010年代においても、Young により 1998 年に提唱された尺度を日本語化して暫定的に援用しているのが現状であり、臨床家・研究者が、妥当性の高い診断や研究成果の発信を続けるには問題の多い状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、依存症に精通した精神医学、心理学の専門家と公衆衛生・疫学の専門家との協働により、計量書誌学的手法を用いて、既存の主要なスクリーニングテスト項目を探索的に検討し、インターネットアディクションの概念を整理・統合するとともに、整理・統合された尺度の妥当性を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、1) 文献の収集、2) 重要な既存尺度の選定、3) 既存尺度の再構成による新尺度の作成、4) 新尺度の妥当性の検証という 4 段階により行った。

1) 文献の収集

本研究に使用する尺度を選定するにあたり、米国心理学会 (American Psychological Association) による心理学に関するデータベースである PsycINFO を用いた。まず、インターネットアディクションに関連する以下の用語を検索した: “Internet dependence” “Internet addiction” “Internet misuse” “Internet abuse” “pathological Internet use” “Internet overuse” “excessive Internet use” “compulsive Internet use” “problematic Internet use”。

なお、各用語の最後の単語は語幹のみとし、全てのフィールドを対象に検索した。また、書籍を対象から除外し、査読の有無に関わらず、専門誌に掲載された論文を対象として検索した。重複して検索された論文を除外した。

2) 重要な既存尺度の選定

収集された論文の書誌情報における検査方法名 (Test & Measures) からインターネ

ットアディクションの調査において良く利用されている重要な尺度を選定した。英語で書かれた尺度については、邦訳を心理尺度法ならびに社会調査法に精通したバイリンガルに依頼した。中国語で書かれた尺度については、日本人医師の監修の下、中国語と日本語のバイリンガルの医療系学生が邦訳を行った。

3) 既存尺度の再構成による新尺度の作成

上記で邦訳された尺度の項目を対象に、医師、臨床心理士、行動心理学者の 3 名が KJ 法による分類を行った。分類に当たっては、複数の尺度で同じ内容が示されている項目を採用とし、1 つの尺度にのみ登場した項目は不採用とした。

専門家による合議により、上記で分類された概念を一つの尺度に統合し、インターネットアディクションに関する新尺度を作成した。

4) 新尺度の妥当性の検証

作成した新尺度の妥当性を検証するため、日本国内の社会人 (製造業企業の社員) を対象に、既存尺度の代表例である Internet Addiction Test (IAT) と今回作成した新尺度を同時に調査し、両尺度の結果の相関を確認した。

4. 研究成果

● 結果

1) 文献の収集

PsycINFO を用いた文献検索によりヒットした論文数は以下の通りであった (括弧内は各用語での検索論文数を示す):

Internet dependence (48 件)
Internet addiction (1135 件)
Internet misuse (12 件)
Internet abuse (45 件)
pathological Internet use (94 件)
Internet overuse (22 件)
excessive Internet use (92 件)
compulsive Internet use (61 件)
problematic Internet use (237 件)

重複して検索された論文を除外した結果、上記により収集された論文は 1303 件となった。

2) 重要な既存尺度の選定と再構成

インターネットアディクションの調査において良く利用されている重要な尺度として、以下の 10 が選定された。選定した尺度について被引用数の多い順に示す:

1. Internet Addiction Test (IAT)
2. Chinese Internet addiction scale (Chen Internet Addiction Scale, CIAS)

3. Compulsive Internet Use Scale (CIUS)
4. Online Cognition Scale (OCS)
5. Diagnostic Questionnaire for Internet Addiction (DQ)
6. Problematic Internet Use Questionnaire (PIUQ)
7. Generalized Problematic Internet Use Scale (GPIUS)
8. Adolescent Pathological Internet Use Scale (APIUS)
9. Internet Relate Problem Scale (IRPS)
10. インターネット依存自己評価スケール 成人用 (K-スケール)

上記の 10 尺度を日本語に訳したものを項目別に細分化したところ、210 項目であった。

- 3) 既存尺度の再構成による新尺度の作成
 重要な既存尺度として選定された 10 の尺度(201 項目)について、医師、臨床心理士、行動心理学者の 3 名が KJ 法を用いて類似項目をひとまとめとし、概念ごとに整理したところ、下記の結果が得られた。すなわち、「暇つぶし」「気晴らし」については【娯楽】としてまとめられ、「現実よりも、ネットの方が人から認められていると感じる」「誰かと一緒に過ごすよりも、インターネットを選んだことがある」「インターネットをしている時、なりたい自分になれる(本当の自分が出せる)」「ネット上のやり取りは気楽だ」は【現実よりもネットの対人関係を好む】としてまとめられた。また、以上の【娯楽】【現実よりもネットの対人関係を好む】に加えて、「インターネットをしている時は活力がわいてくる」は【インターネットを長時間使用する理由】としてさらにまとめられた。また、「耐性」「離脱」は【薬理学的基準】としてまとめられ、「インターネットをすることで仕事や勉強、家事がおろそかになったことがある」「全般的な社会的障害」は【社会的障害】としてまとめられた。そして、「インターネットの時間を減らすよう誰かに注意されたことがある」「短縮失敗経験」「全般的な制御困難」「予定より長時間行った経験」は【自己制御困難】としてまとめられた。

上記にまとめられた分類から、18 項目からなるインターネットアディクションの新尺度を作成し、「Consolidated Internet-Addiction Scale」(CIS) と名付けた。

なお、KJ 法によってまとめられた分類のうち、抽象的であるため答えづらいと思われるグループは尺度項目を設けなかった。また、本研究実施時点においてインターネット利用料金の定額制が主流になってきているため、「インターネット利用料金にまつわる経済的問題」は社会的重要性が低くなってきており、時代的な普遍性の観点から除外した。

Consolidated Internet-Addiction Scale: CIS

1. インターネットは暇つぶしになる。
2. 気分(いやな気持ち)を紛らわすためにインターネットをする。
3. 現実よりもネット上の方が人から認められていると感じる。
4. 誰かと一緒に過ごすよりも、インターネットを選んだことがある。
5. 誰かと一緒にいるとき、インターネットをしていて注意されたことがある。
6. インターネットをしているとき、なりたい自分になれる。
7. インターネットをしているとき、本当の自分が出せる。
8. インターネット上のやり取りは気楽だ。
9. 1 年前に比べ、インターネットに費やす時間が長くなった。
10. インターネットが使えないと不安になったりイライラしたり落ち込んだりする。
11. インターネットをしていないとき、重要な情報を見逃していないか気になる。
12. インターネットをしている時間の長さを人に隠したことがある。
13. インターネットの時間を減らすよう他の人に注意されたことがある。
14. インターネットをする時間を減らすようとして失敗したことがある。
15. もうちょっとだけと思ってインターネットをダラダラ続けたことがある。
16. 思ったよりも長くインターネットをしたことがある。
17. インターネットをすることで睡眠不足になっている。
18. インターネットをすることで仕事や学業、家事がおろそかになったことがある。

新尺度は、よく用いられる既存の尺度を、概念の分類と整理により再統合したものである。尺度の中に、新規に考案した項目を敢えて含まないことで、既存の尺度との連続性に配慮した。しかし、上記のように、抽象的で解答が困難である項目や時代の普遍性の観点から不適切と思われる項目は除外するなど、今後とも使い続けられる内容となることを心がけた。

4) 新尺度の妥当性の検証

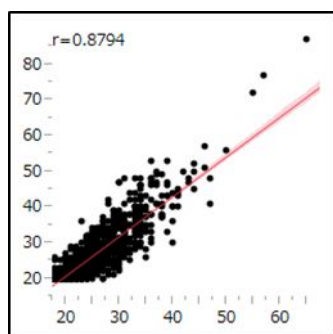
作成した新尺度の妥当性を検証するため、日本国内の社会人(製造業 1 社が有する 8 工場の職員 1147 名)を対象に、既存尺度の代表例である IAT と今回作成した新尺度を同時に調査した。調査時期は 2016 年 4 月であり、1055 名から回答を得た(回答率 92.0%)。

CIS は 18 項目(4 件法)から成り、理論上の最小スコアは 18 点、最大スコア 72 点である。今回調査では、1052 人が回答し(回答欠損 3 人)、スコアの平均が 25.0、標準偏差が

5.85、最小値は 18、最大値は 65、中央値 24、四分位範囲は 7 であった。

IAT は 20 項目 (5 件法) から成り、理論上の最小スコアは 20 点、最大スコア 100 点である。今回調査では、1055 人が回答し、スコアの平均が 26.4、標準偏差が 7.41、最小値は 20、最大値は 87、中央値 24、四分位範囲は 8 であった。

CIS と IAT の相関係数は 0.88 (95%信頼区間: 0.86-0.89) であり、高い相関が確認された。



(横軸: CIS 縦軸: IAT)

● 考察

依存症に精通した精神医学、心理学の専門家と公衆衛生・疫学の専門家との協働により、計量書誌学的手法を用いて、既存の主要なスクリーニング尺度を現代の状況に合う形で再構成し、既存の尺度との整合性を保った上で利用可能なインターネットアディクションの新尺度を作成した。

1000 人以上を対象とする調査の結果、既存のインターネットアディクション尺度の代表例である IAT と新尺度の CIS は高い相関を示し、回答のしやすさや時代的な普遍性の観点から項目を改変した CIS においても、既存の尺度との整合性が保たれていることが明らかとなった。

依存、嗜癪に留まらず、心理・行動尺度全般の問題として、ある尺度がスクリーニングとしての性質を持つのか (つまり、閾値を設定して、ある異常のあるなしを二値で示すための尺度なのか)、重症度を測定する連続的なスコアであるのか、その両方を満たした尺度であるのかは念頭に置かれるべきである。今回の新尺度 CIS では、IAT との相関の高さから、スクリーニングとしての価値を有することが示唆されたが、重症度のスコアとして利用可能であるかは今後の課題である。

最後に、本研究に協力いただいた調査協力者の皆様に深く感謝を申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

高橋伸彰, 木戸盛年, 野田龍也

インターネットアディクション尺度の統合: Consolidated Internet-Addiction Scale (CIS) の提案.

日本アルコール・薬物医学会雑誌

査読有

52 巻、2017、287-296

http://www.f.kpu-m.ac.jp/k/jmsas/wordpress/wp-content/uploads/magazine_pdf/magazine52_2017.pdf

高橋伸彰

「ネット依存者」における志向性と脆弱性: 各種サービスごとの嗜癪の経験と心理的背景との対応分析を中心に.

人文論究 (関西学院大学)

査読無

65 巻、2016、131-149

https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16352&item_no=1&page_id=30&block_id=27

[学会発表](計 8 件)

Moritoshi Kido, Tatsuya Noda, Nobuaki Takahashi

Considerations on the present state and issues of gambling disorder in Japan: The prospect of psychoeducation for gambling disorder.

The 5th APSAAR & TSAS

2017

木戸盛年

余暇活動としてのギャンブルとギャンブル障害

第 46 回日本神経精神薬理学会

2016

Moritoshi Kido

the actual situation of gambling disorder in Japan and needs for preventive education.

ACHP2016 (アジア健康心理学会)

2016

高橋伸彰, 木戸盛年, 野田龍也

「ネット依存」概念: KJ 法による既存尺度項目の図式化から.

平成 28 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会

2016

Moritoshi Kido

Casino in Japan, to do or not to do?

the 4th APSAAR/5th IDARS Conference

2015

木戸盛年, 高橋伸彰, 野田龍也

インターネット依存症
関西心理学会第 127 回大会
2015

高橋伸彰, 成田健一, 嶋崎恒雄
主観的動機の種類に基づく各嗜癖行動の
類似性.
平成 26 年度 アルコール・薬物依存関連学
会合同学術総会
2014

高橋伸彰, 成田健一, 嶋崎恒雄
人はなぜ嗜癖行動をするのか?: Web 日記
法を用いた主観的動機に関する調査から.
日本心理学会第 78 回大会
2014

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野田 龍也 (NODA, Tatsuya)
奈良県立医科大学・医学部・講師
研究者番号: 70456549

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

木戸 盛年 (KIDO, Moritoshi)

高橋 伸彰 (TAKAHASHI, Nobuaki)